

日向神話の魅力——天照大御神を中心に——

大阪市立大学名誉教授

毛利 正守

(一)古事記(上巻)伊耶那岐命の禊——天照大御神の誕生

是に、(伊耶那岐命) 其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ往きき。黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。是を以て、伊耶那伎大神の詔はく、「吾は、いなしこめ、しこめき穢き国に到りて在りけり。故、吾は、御身の禊を為む」とのりたまひて、竺紫の日向の橘の小門のあはき原に到り坐して、禊しき。初めて中つ瀬に墮ちかづきて滌ぎし時に、成り坐せる神の名は、八十禍津日神。次に大禍津日神。此の二はしらの神は、其の穢れ繁き国に到れる時に、汚垢れしに因りて成れる神ぞ。次に、其の禍を直さむと為て成れる神の名は、神直毘神。次に、大直毘神。是に、左の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、天照大御神。次に、右の御目を洗ひし時に、成れる神の名は、月読命。次に御鼻を洗ひし時に、成れる神の名は、建速須佐之男命。

(二)日本書紀(巻一、第五段の一書第六)伊弉諾尊の禊——天照大神の誕生

然して後に伊弉諾尊、伊弉冉尊を追ひ、黄泉に入りて、及きて共に語りたまふ。伊弉諾尊既に還りたまひ、乃ち追悔みて曰はく、「吾前に不須也凶目き汚穢き処に到る。故、吾が身の濁穢を滌ぎ去らむ」とのたまひ、則ち往きて筑紫の日向の小戸の橘の檍原に至りて、祓除へたまふ。便ち中瀬に濯ぎたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて八十柱津日神と曰す。次に其の枉れるを矯さむとして神を生みたまひ、号けて神直日神と曰す。次に大直日神。左の眼を洗ひたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて天照大神と曰す。復右の眼を洗ひたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて月読尊と曰す。復鼻を洗ひたまふ。因りて神を生みたまひ、号けて素戔嗚尊と曰す。凡て三神なり。

〔参考〕播磨国風土記(賀古郡)日岡。み狩せし時に、一鹿この丘に走り登りて鳴く。その声比々といひき。故、日岡と号く。

(三)古事記(上巻)天照大御神、高天原へ

此の時に、伊耶那伎命、大きに歡喜びて詔はく、「吾は、子を生み生みて、生みの終へに三は

しらの貴き子を得たり」とのりまたひて、即ち其の御頸珠の玉の緒、もゆらに取りゆらかし
て、天照大御神に賜ひて、詔ひしく、「汝が命は、高天原を知らせ」と、事依して賜ひき、故、
其の御頸珠の名は、御倉板拳之神と謂ふ。次に、月詭命に詔ひしく、「汝が命は、夜之食国
を知らせ」と、事依しき。次に、建速須佐之男命に詔ひしく、「汝が命は、海原を知らせ」
と、事依しき。
故、各依し賜ひし命の随に知らし看せる中に、速須佐之男命は、命せらえし国を治めずし
て、八拳須心前に至るまで啼きいさちき。

(四) 日本書紀(卷一、第五段の正文) 日神(一書云、天照大神)、天上へ

伊弉諾尊、伊弉冉尊共に議りて曰はく、「吾已に大八洲国と山川草木とを生めり。何ぞ天下
の主者を生まざらむ」とのたまふ。是に共に日神を生みたまふ。大日靈貴と号す。一書
に云はく、天照大神といふ。一書に云はく、天照大日靈尊といふ。此の子光華明彩しく、六合
の内に照り徹る。故、二神喜びて曰はく、「吾が息多しと雖も、未だ此の若く靈異しき児有
らず。久しく此の国に留むべからず。自当に早く天に送りて、授くるに天上の事を以ちてすべ
し」とのたまふ。是の時に、天地相去ること未だ遠からず。故、天柱を以ちて、天上に挙げ
まつりたまふ。

(1) 萬葉集(卷十一、二四〇三番) 禊の例

玉くせの 清き川原に 禊して 齋ふ命も 妹がためこそ

(2) 古事記(下卷、履中天皇条) 禊の例

故、曾婆訶理を率て、倭に上り幸す時に、大坂の山口に到りて、倭に上り到りて、詔
ひしく、「今日は此間に留りて、祓禊を為て、明日参る出でて、神宮を拝まむ」とのりたまひ
き。

(3) 日本書紀(卷十二、履中天皇条) 禊の例

(車持君に) 悪解除・善解除を負せて、長渚崎に出して、祓禊かしたまふ。

(イ) 日本書紀(卷七、景行天皇条) 「日向」の地

子湯県(宮崎県)に幸し、丹裳小野に遊びたまふ。時に 東を望して、左右に謂りて曰
はく、「是の国は、直に日出づる方に向けり」とのたまふ。故、其の国を号けて日向と曰ふ。

(ロ) 日向風土記(釈日本紀卷八所引) 「日向」の地

總向の日代の宮に 御宇 乎し大足彦の天皇の世、(景行天皇は) 児湯の郡(宮崎県)に幸

したまひ、丹裳の小野に遊びたまひき。左右に謂りて曰りまたはく、「この国の地形は直に扶桑に向けり。宜なへ日向と号くべし」とのりたまふ。

(A)古事記(上卷) 一回目の天孫降臨

是を以て、白しし隨に、日子番能邇々芸命に科せて詔ひしく、「此の豊葦原水穗国は、汝が知らさむ国ぞと言依し賜ふ。故、命の隨に天降るべし」とのりたまひき。
爾くして、日子番能邇々芸命の天降らむとする時に、天の八衢に居て、上は高天原を光し、下は葦原中国を光す神、是に有り。(天宇受売神が)問ひ賜ひし時に、答へて白ししく、「僕は、国つ神、名は猿田毘古神ぞ。出で居る所以は、天つ神御子天降り坐すと聞きつるが故に、御前に仕へ奉らむとして、参る向へて侍り」とまをしき。
爾くして、天児屋命・布刀玉命・天宇受売命・伊斯許理度売命・玉祖命、并せて五りの伴緒を支ち加へて天降しき。是に、其のをきし八尺の勾璫・鏡と草那芸剣と、亦、常世思金神・手力男神・天石門別神を副へ賜ひて、詔ひしく、「此の鏡は、専ら我が御魂と為て、吾が前を拝むが如く、いつき奉れ」とのりまたひ、次に「思金神は、前の事を取り持ちて、政を為よ」とのりまたひき。此の二柱の神は、さくくしろ伊須受能宮を拝み祭りき。次に、登由宇気神、此は、外宮の度相に坐す神ぞ。

(B)古事記(上卷) 二回目の天孫降臨

故爾くして、天津日子番能邇々芸命に詔ひて、天の石位を離れ、天の八重のたな雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天の浮橋に、うきじまり、そりたたして、笠紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐しき。是に、詔はく、「此地は、韓国に向ひ、笠沙の御前を真来通りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国ぞ。故、此地は、甚吉き地」と、詔ひて、底津石根に宮柱ふとしり、高天原に氷椽たかしりて坐しき。是に、天津日高日子番能邇々芸命、笠沙の御前にして、麗しき美人に遇ひき。爾くして、問ひしく、「誰が女ぞ」ととひしに、答へて白ししく、「大山津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花佐久夜毘売と謂ふ」とまをしき。唯に其の弟木花佐久夜毘売のみを留めて、一宿、婚を為き。故、其の火の盛りに焼ゆる時に生める子の名は、火照命。次に、生みし子の名は、火須勢理命。次に、生みし子の御名は、火遠理命、亦の名は、天津日高日子穗々手見命。産める御子を名けて、天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命と謂ふ。生みし御子の名は、若御毛沼命、亦の名は、豊毛沼命、亦の名は、神倭伊波礼毘古命(のちの神武天皇)。

(C)日本書紀(卷二、第九段の正文) 皇孫降臨

時に高皇産靈尊、真床追衾を以ちて、皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊に覆ひて降りまさしむ。皇孫乃

ち天磐座を離ち、且天人重雲を排分け、稜威の道別に道別きて、日向の襲の高千穂峰に天降ります。既にして皇孫の遊行す状は、穗日の二上の天浮橋〔天浮橋〕は、ここでは高千穂峰の二上山と地上の間にかかる梯より、浮渚在平処に立たして〔浮島の平地のところ〕に降り立たれて、菅穴の空国を頓丘より覓国ぎ行去り、吾田の長屋の笠狭の碕に到ります。時に彼の国に美人有り。名けて鹿葦津姫と曰ふ。亦是神吾田津姫と名ひ、亦是木花之開耶姫と名ふ。皇孫因りて幸したまふ。即ち一夜にして有娠みぬ。生り出づる児、彦火火出見尊と号す。因りて児を名けて、彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と曰す。次に神日本磐余彦尊〔のちの神武天皇〕（を生みたまふ）。

○天照大御神を中心に天皇へと継がる系譜

天照大御神——日向国（宮崎県）にて誕生。

天孫・邇々芸命——天照大御神の生誕の地と同じ日向国に天孫降臨。そうして邇々芸命の御子である火遠理命から神武天皇へと繋がる皇統がこの地で誕生。

火遠理命（山幸彦）——建鵜草葺不合命——神倭伊波礼毘古命（神武天皇）——この日向国に坐す。

天照大御神——天忍穗耳命——邇々芸命——火遠理命——建鵜草葺不合命——第一代の神武天皇……第十代の崇神天皇——第十一代の垂仁天皇——第十二代の景行天皇……第一百二十四代の昭和天皇——第一百二十五代の明仁天皇——第一百二十六代の徳仁天皇（今上天皇）